



カット 皆川泰藏

想

随

道づれ

大木 久雄

一月のある夜。モスクワの中央駅。気温は零下十七度だと言う。肌が痛い。私はパリの国際列車に乗り込んだ。不安で一杯な上に、その寝台車の一室に黒人とドイツ人が乗り込んできた。ドイツ人はともかく黒人と同室かと思うと、何となく嫌な気が

した。全く黒い。歯だけが不気味に白く光るのだ。彼はモスクワ大学に留学してパリまで行くと言う。話を聞いていると何とロシア語、英語、仏語に堪能らしいので驚いた。ドイツ人は英語がわからないのでほとんど喋らなかつた。列車は西へ西へ白一色の草原を突っ走る。翌日、夜明け近く、列車はポーランドとの国境の駅ブレストに着いた。この時、黒人は手持ちのルーブルを使い果さないと無駄になると教えてくれた。モスクワを出る前、余ったルーブルはブレストでドルに変えてくれると聞いていたので、ここでドルに変える積りだったが、そんなことはしてくれないと言う。これは大変とみやげものを買おうと思ったが何もない。仕方なく蛙の缶詰を買った。彼が教えてくれなかつたら使える当の金が残ったことになる。

やがて列車は国境を越えポーランドへ。午後ワルシャワに着いた。彼が三十分停車するから散歩しようと言う。彼の言うまま二十分ほど駅の構内を歩いてホームに戻ったら列車がない。瞬間、こんな所で立往生したらたまったものではないと、はっと

した。それと同時に一瞬彼に不信感を覚えた。こんな旅に手慣れた感じの彼に安心して従っていったのを悔んだ。しかし、それも東の間、列車はホームに入ってきた。なんのことはない。機関車の入れ替えだった。あちらでは大体こんなことにはいちいち説明しないのだ。

列車はまた西へ。その夜、東ドイツに入り、真夜中、ベルリンを通過。西ベルリンは孤立した小さな一つの国である。厄介なことに、国境通過のたびに両国の役人がパスポートと荷物の検閲に乗り込んでくる。それ自体は僅かな時間で済むが極度に緊張する。西ベルリン通過の際はわずか三十分ほどの間に四回やって来た。(モスクワパリ間では計十四回)真夜中の検閲は特に神経が苛立つ。こんな時、彼は要領よく要点を教えてくれた。それと、この辺に来ると二人とも疲れて口数も少なくなっていたが、時おり彼は次の駅はどこだとか、必要なことを簡単に、ぼつんと教えてくれた。それはぶつきら棒であったが、ごく自然に親切を越えた何かがあった。列車は翌朝西ドイツ、ベルギーを通過して、夕方ようやく

パリに着いた。二昼夜の長旅に疲れきっていたのと、早く宿に行きたい一心で、彼とはそのまま再会も約束せずに別れたが、始めの印象とは全然違つたヒューマンな香りが蛙の缶詰と結びついていつまでも頭に残つた。これが本当の道づれと言うものだから。蛙の缶詰は殊の外うまかつた。忘れられないものの一つである。

(昭24外専卒・大学職員)

旅情

藤森庚子郎

よく旅に出る。出るといつてもせいぜい一二泊の小旅行である。旅は一人がよい。時に家妻を伴う時もあるが、たいがいは独り旅である。旅の孤独を楽しみ味うのである。

十月は能登半島の突端緑剛岬を廻つて平時国館址の庭を見に行った。建物も庭園も江戸の营造だが庭園に鎌倉時代の野筋の形

跡がないかどうかを調べたかったのである。能登半島は終戦直後の晩秋、あのあたりの砦壕土を利用して断熱煉瓦工場設立のため飯田に暫く滞在して正院から宇出津まで珠洲一帯の地質を調べて歩いたことがあり、その時いろいろの珍らしい種類の茸を喰べさせてもらった記憶がある。付近の曾々木海岸は岩礁の変化に富み半島随一の美景である。

十一月は伊豆韭山の願成就院をたずねて運慶作の不動、毘沙門両像を見た。奈良市東郊忍辱山の円成寺にある大日如来像とともに運慶若年の作として注目すべき彫像であるし、また当時の奈良仏師が関東方面に活動した史実を証明するものとして面白い問題をふくんでいる。願成就院を訪ねたついでに付近の頼朝の配所であった蛭小島や江川太郎左衛門英龍邸址をたずねた。茶店の若い娘さんが反射炉の説明をしていたがその態度、またその説明振りに感心した。無駄なことは一切言わずキビキビと正確な史実を観光大衆に話している爽やかさに感心した。これに反し僧侶の説明はどここの地方でも大体なっていない。俗臭紛々として

また無知である。帰途伊豆西海岸を堂ヶ島から松崎、波勝に出て下賀茂、下田、熱川、伊東に点在する国立、公立並びに民間経営の沢山の植物園を見て廻つた。民間会社や個人経営の植物園の管理の行き届いていないのに較べて官公立の植物園はどのことも退廃を感じさせられた。これは予算の関係というよりも精神の問題であるようだ。仕事に対する情熱が見られない。三島市の旧李王家別邸は現在市の公園になっているが、有名な富士岩の堆積帯の内部から噴出していた雪解水の清泉はすっかり枯渇して、雑草茫茫と群生し塵埃これを被覆して見ると忍びない惨状たる荒廢振りである。富士山麓の伏流水を全部産業用に奪つてしまつて文化財自然景観などは何ら顧みない地方都市当局者の常識を疑いたくなる問題である。もつとも地方によつては文化人などと称する徒輩が馬鹿の一つおぼえ見たいにいたずらに保存保存と叫んでばかりいるところもあるが、近時の物質偏重経済横暴は目に余るものがある。

十二月はもう師走の雪の降り出した松江に出掛けた。大社造建築の最も古い遺構で

ある神魂（かもす）神社本殿を見てから隣接の正林寺墓地に出雲国造が千家、北島両家に二分する前の祖廟の墓塔を数基見た。鎌倉中期の五輪塔が多い。凝灰岩で薬研彫りの梵字は仲々雄大であるがこれも破損はなはだしい。ついでに月照寺に松江藩主歴代の廟を展覧したが、近頃の宍道湖の濁りのひどいのに一驚した。宿で出された白魚や公魚がこの泥水から漁れるのを見てると食欲減退であった。翌日平田にまわり万福寺の藤原仏九体を見た。いわゆる出雲形式の巨大な一木彫像で藤原彫刻ながら古い天平風を残す特異な群像である。中でも四天王像が最も勝れている。丹波から山陰地方に点々と残るこの彫風の系統調査はわが国彫刻史上面白い課題である。

（大16 經卒・財団法人京都史蹟会理事長）

善意の時代

田中伊佐久

どこか未開のところに行つて悪いことをして儲けてもあまり問題にならぬような時代はもうとつと過ぎて去つたようである。どのように大義名分らしいことを言つても人の座敷で刀を振り廻しては問題とされない時代である。どこかに行つて吸い上げて来ようというのでは、そのどこかの国はもう絶対を受け入れてくれぬ時代が来たのである。これからは相互に善意をもって助けあう時代である。この時代について目覚めるのが早ければ早いだけその国家は世界の指導者になるであらう。

今日、二つの中国の問題はかなりむづかしい問題である。私自身引揚者の一人であるが、過去において日本人が中国に対してなした仕打ちに対して、ともあれ莫大な引揚者、復員者が生命を全うして帰国したということとは驚くべきである。敗戦後、蒋介石氏によつて出された有名な布告「敵を愛せよ」が中国人に徹底したためである。私たち日本人はこの意味において二つの中国にして、中国に対して恩義がある。私たちは善意をもって中国との交りを忍耐をして回復したい。

私は戦争中、昭和十九年四月に山東省青島にある日本人の教会の牧師として赴任した。当時、北京におられた小川秀一牧師が来られて、蒙古の奥地に婦人宣教師が馬を駆使しつづ、二十数年も伝道をしていることを話して下さった。私は言に出せぬ感動を覚えた。一体、私たち日本人は權益を得るために力を背景にアジアの各地に浸透して行ったが、アジアの諸民族に仕えるために働いて来たであらうか。孫文を助けた官崎踏天の無慾はいまだに語り草であるが、これからの低開発国の開拓は仕えるためではなくて決して成功するとは思えない。大原総一郎氏が中国に対するつぐないのためブランドを中国に輸出したいと真剣に考えていたということをつか聞いたことがあるが、クリスチャン大原孫三郎氏の令息としての彼の考えは素晴らしいと思う。これからの実業家はこの精神でやらねばならぬ。お隣りの韓国や北鮮に対してもそうである。彼らを利用しよう、儲けの道具にしようという考えは捨てねば、お互にとつて脅威となる時代が必ずくるのである。相互に善意をもって有無相通ずる共存共栄の体

制をつくらねばならぬ。京都韓国教会牧師田永福氏（織田樽次氏）は韓国人のために生命を投げ出した善意の人である。差別されて来た韓国人の中にとびこんであらゆる迫害に耐えて彼らに仕えて来た。これからの時代はこのような善意の人によつて造られるのである。数年後にはSSTが地球をとび廻るのであるが、世界は全く狭くなつた。家の中で大槍をふり廻すようことは早くやめて、相互の善意で新時代をつくり上げたいものである。

（昭14大神卒・京都九太町教会教師）

真理は古くて新しい

竹中 彪

同志社の雛形がありとすれば、熊本における大江高校の伝統的存在は、その一つであらう。いま同校初代校長海老名弾正先生以来八十年の校史を繰広げるならば、その志学遠大かつ高邁、その表情純潔で至誠の

学風が感得せられる。新島襄先生から寄せられた大文字『志在千里』『美德以為飾』は昭和二十年の戦災で惜しくも焼失したが、今なお学園の日々に生きている。

明治百年を省みて更に確信ある前進をしようとする時、熊本百年の歴史は意外に大きな河川となつて、明治百年を流れていたことに気がつくであらう。熊本では、明治百年を記念して、既に種々の企てがなされている。その企ての中で横井小楠とジェンスは明治百年の歴史を築く主要原動力をなしていたことに、県下学統の如何を問わず、心ある者は大きく背き、また一般の常識にもなろうとしていた。

しかし五箇条の御誓文を起草した横井小楠の偉大さも、死後五百年を期して漸く明瞭光彩を放つであらうとは識者の語るところである。新島先生は自ら同志社創成のために二百年を期せられたが、大江高校では横井小楠を学統の祖と仰ぎ、竹崎順子を校母と慕っている。（横井小楠夫人つせ子と蘇峰、蘆花兄弟の母久子は共に竹崎順子の令妹である）横井小楠の長子横井時雄は同志社第三代社長であり、特に徳富蘇峰は、

新島先生を唯一最大の師として常に誇りとせられたことは世人のよく知るところであるが、横井時雄の世界的活躍、蘇峰修史の大業、蘆花不滅の文章は、いずれも新島先生に深い知己を感じて大成した肥後の男子のシンボルである。

稜々たる肥後男子熊本バンド揺籃の場熊本洋学校のジェンスには、神に捕えられた栄光を偲ぶことが出来る。同志社が創立せられるために熊本洋学校が用意されたと考えて、異議の出ようがあらうか。

横井小楠から新島襄までの一連の捩理に、火の国熊本の地が契機となつたことは、私にとつて妙味深いものがある。熊本市京町、往生院に眠る小楠の甥横井大平が明治三年米国より帰朝、肺患の重態を冒して熊本洋学校設立に奔走、明治四年四月二日ついに病に仆れたのは二十二歳であった。私の心はよく青年大平の墓前に立つ。

花岡山上熊本バンド奉教献身の誓いは明治九年一月三十日。それは同志社が創立された翌年のことである。そして熊本洋学校が約定によつて閉校される直前のことであった。

ジュエンス先生から新島先生へ!!。

摂理は新島先生を中心に、明治百年史へ広く深く滲透したが、未だその緒にあって期待はむしろ今後にある。

毎年一月三十日未明、花岡山上における熊本バンド記念集会上に、大江高校女生徒數十名は、寒風を冒して六キロの道を勇んで歩み参列、熊本バンドの精神に感激、肥後乙女の意気が養われている。帰途、山上で芋粥に舌鼓をうつのもふさわしい情景である。ここで、二三の思い出に移るのを禁じ得ないのはなぜだろうか。

今から十五年前のことであるが、田畑忍同大教授が熊本大学の招聘で学術講演に来熊され、その謝礼金二千円をそっくり大江高校に寄付して帰られたが、その事実は絶えず私の感銘を新たにしてくれる。

同志社在学時代の思い出に飛ぶ。学友長瀬信一君と、最終学年の一年間、一日に必ず一度は、若王子山頭、新島先生の墓前に詣ることを固く約束して、同道出来なかった日は随時一人で行くことを認めて実行した。時に夜晩く山道の独り歩きは気持ちよくなかったが、有難い思い出である。長瀬

君は東京都北多摩郡久留米町のアメリカンスクールに勤めつつ、自宅を解放して伝道、独立の教会を創立した。長瀬君の外に今一人、那是製糸会社の師、山崎隆君と、同大入学当初、相語らい、新島精神を学ぶために寡会を結成、海老名総長の祝福を受けたが、初代指導者竹崎八十雄先生から末光信三先生に引継がれて、終戦近くまで続いた。会員は卒業後各分野に志を得て『良心の全身に充滿したる大丈夫たれ』との新島先生の熱誠の言を、或は強く、或は暖く、朝夕心耳に聴いていることであろう。

(竹崎八十雄先生は同志社宗教主任を大正十二年九月辞して大江高校第七代の校長に就任)

(大13大法平・大江高校常任理事)

ラグビーと私

久省 一

ラグビーの体験者でもない私がこんな題

で書くのはおこがましいことかもしれないが、それが許されてもよいほどラグビーファンになってしまった。もつずつと昔から、元旦にはお雑煮もそこそこにして花園の全国高校ラグビー大会に出かけるようになっていた。今年同志社高校が五年ぶりに出場したのだから当り前であるが、出場しなくても私は出かけてゆくのである。この大会には北は北海道から、南は九州の果てから三十二校のチームが集る。そして当然のことながら、ルースやタイトスクラムの周辺でお国訛りまるだしの叫声がとびだすものだから、これが緊張した空気の中にユーモアをまき散らしてひとくたのしい。

今年の同志社高校は西日本でも屈指の好チームであったのに、黒沢尻の重量FWの壁に打つかってしまつて苦杯を喫した。それでもそれほど口惜しいとは思わなかった。爽やかな後味さえ残っていた。これは他のスポーツでは味えないもので、やはりラグビーが紳士の国英国の伝統のスポーツであるからなのだろう。

お正月にラグビーを見にゆくのは同中時代からはじまつている。私の学年が同中の

黄金時代の最後であった。それまで七回、全国優勝をしており、八回目の優勝が同級生たちによって獲得された。張、柯、吉田らのTB陣が駆け廻るところ敵なく、優勝戦が早稲田実業相手で41対0であったと覚

五平さん

五平さん——本名は松本五平、同志社初期の校僕で、ユーモアにとむ伝説的な人物である。信州生れで身長四尺余、からだ小さいうえに頭が大きかったので、学生からは「エスキモー」とか「一寸法師」と呼ばれて親しまれた。古い校友の回顧談にもしばしば登場する。

箒を立てて大名行列の槍持ちの真似をして学生の前を歩いたり、デタラメ英語をまじえての演説は喜劇的な傑作だったそうである。また、チンドン屋のまねをして学生を集め、学生のいたずらを言葉たくみに風刺してそれをたしなめたといわれる。



その反面、彼の性質は純朴かつ真面目で、新島先生と同志社のために労をおしまず、用を命ぜられれば響の声に応ずるがごとくであった。とくに新島先生を尊敬し、先生の姿を見ると鉢巻をとって心のこもった挨拶をするのが常であったという。その死にのぞんで「いつまでも先生の傍にいたい」と遺言した。明治三十二年八月五日没、若王子墓地に葬られた。六十八歳。

一応練習をすましたあとで、フロントロー三人がろく木に向つてボールを掻く練習をしているとき、ボールインの手伝いをしていた。それが日の暮れるまでつづくのである。私はそのとき、縁の下の力持であるフロントローの苦勞をいたく感心して見つめていた。それで今でも、面白くないといわれるFW戦が私には結構たのしい。はなやかなバックスの蔭にかくれているFWの苦勞がよくわかるからである。

ラグビーを見ているとき私はただ客観的に眺めているわけではない。主観的に見ているようである。文学や演劇の鑑賞に「感情移入」という言葉がつかわれるが、それに似ている。するとそれは感情移入というより、感覚移入とでもいうべきなのであるうか。

昨年の秋、西京極での同大のいくつかの試合を見ていたとき、それがそうなのであった。自分が同大のCTBの一人になったような錯覚状態になっていて、相手側の密集の中をすりと抜けてゆくスリルを味わったりする。その代り、猛烈なタックルを受けたらすると、感覚に受けるショックも

はげしい。このショックがつづけば神経がもたないものだから、そこは現金なもの、また純粋な客観的な立場に逆戻りしてしまうのである。そしてホッとした感じになる。

一月十五日の近鉄と法政のゲームをテレビで見ると私のラグビー熱もシーズンオフになり、あとは高校や同大の新チームに対する期待をひそかにほくみはじめるわけである。

(昭11大英卒・中学校教諭)

〃ちいさな願い〃

多賀 敏子

冬休みで彼女らが帰省してしまつた寮は静かだ。つい先日まで職員を加えて八十九名の大世帯であつたことを忘れてしまつてしまふほど。学期が終わると後始末や次学期の準備等の雑用に追われ、ホッと出来るのには時間がかかるが、それはいつもアツと

いう間に過ぎてしまふ。でもなければ私は一学期間でバラバラに解体されてしまつた身体の中の部品を元の場所にもどし歯車に油をさして、もう一度回転しはじめるのを見とどけることが出来ない。

寮の仕事がこれほど大変なものとは知らなかつた。女専の三年間寮生活をした経験があるが、今になってお世話下さつた先生方、おさん方のご苦勞がわかり頭のさがる想いがする。「ほんとにありがとうございました。」この誌上をかりて御礼申し上げます。

四十一年の四月、導かれるままに、それまで「岡山博愛会」という社会事業施設の病院勤務であつたが十五年ぶりに同志社にかえり、女子中高の寮で働くようになった。私の学生時代、平安寮は今の黎明館のあるところであつた。毎日、寮の前を家政館の教室へといそぎながら、こんなに小さい時から同志社に学べる可愛い彼女らを羨ましく眺めていたのを思い出す。岡山の小さな農村から戦争中に知り合つた人が同志社出身でいい人であつたからという理由と父のさまざまな願いがこめられて一人の友

も知人もない同志社に送られて来た私、もちろん聖書を開いたのも教会に行くのもはじめてという私には平安寮の小さい人たちがほんとに羨ましかった。そんな事に刺戟されたか三年間の学校生活も寮生活もいい先生と先輩と友人に恵まれたのしいものであつた。同志社の一歩いいものを見つけないでその信仰を通し人格を通して語られた言葉は不思議な力をもって私を支え生かしてつづけて来たように思う。

今の平安寮はあの頃の木造とは異なり、女子部の裏門から出て三、四分のところ、静かな住宅街に鉄筋五階建となつてそびえている。食堂も浴場も内にあり冬は暖房まで入る。居室は四人づつでベッド、机、椅子、戸棚、ロッカー、毛布、シーツまで備え付けられたすばらしいもの。きれいな床。栄養士さんの指導のもとに暑いときも冷たい時もいとわず食事の世話をして下さる方々。みなさんの協力、覚えて下さる方々の祈りに支えられて今年も働きたいと思う。建物の美しさをほめられるよりも、その中に住む彼女らが健やかに身も心も美し

く成長し神にも人にもよるこぼれる人になつていくのをほころぶことが出来るようにになりたい。

明日あたり帰寮して来る彼女らのために懸命に働こうと思う。私に「生きる」ことを教えて下さつた同志社のために。そしてとるに足りない私をも「生かして」「用いて」下さる主のために……。

(昭26女専卒・平安寮舎監)

彰 往 考 来

荒川 民助

俗に過去をふり返るな、というが、私は「彰往考来」という言葉が好きである。長い人生の途中で、それまで歩んできた道をかえりみて、その中から教えられることは大切なことである。

高校時代までを東北の片田舎ですごした私は、ある人のすすめで、京都へ来て、同志社大学の英文科に学び、卒業後、岩倉の

高校に一教師として勤めて、在京十余年となつた。思えば、京都での私は学生として、教師として、同志社とはきり離して考えられないのであり、その深い縁を思う時、不思議なみえざる糸に導かれてきたように思えてならない。

十余年前には、京都に定住するなどは夢想だになつた私、今ではこの古都にすっかり根を下し、この地で家庭をもち、平穩無事に生活している。これは、すべて、これまで、何かとお世話になつた多くの人々——恩師、先輩、友人、知己、同僚、父母兄弟姉妹ら——の賜物である。こうした人々の深く強い人間愛によつて、私自身の人生は支えられてきた。この人間愛の絆こそが、私の体得した、人生における最も大切で必須な一つの真実である。

一見、一個人が、この社会を独立独歩しているように思えるが、この人間愛がなかったらば、彼はとうなることであろうか。人と人との間に、相互の存在価値や生命の尊厳さを認識し、理解し、扶け合うという人間愛が生まれ得ることによつて、真に人間の平和な社会の基盤が築かれている

のではなからうか。この基盤の上になつてこそ、あらゆる人間関係の問題を解決すべき一つの鍵が見出されるのである。

この実感は、京都に来て、同志社で過した十余年を通して学んだことであるといえる。そこには、新島先生の慈愛の見えざる働きかけがあつたと私は思いたい。田舎の一青年であつた私も、今、ようやくにして、同志社人としての自覚に立つて、めぐり合った多くの人々に感謝の念を抱きつつ、新たな前進のために、一層の努力をせねばならないと思つている。そして、あらゆる機会を通して、すべての人々に人間愛の尊厳を語り、少しでも、彼らのために、また、その社会のために、貢献できるようにすることが私の理想であり、さらに、すべての人々の努力によつて、それが世界平和への道にもつながる日々くることを念願している。

(高校教諭・英語)